平成２７年度

年 次 報 告 書

一般財団法人日本青年館

Ⅰ．公益活動

１．青年活動振興事業

１）第64回全国青年大会の開催（11月13日～16日　東京体育館他）

全国青年大会は、講和条約発効を記念して1952（昭和27）年に第1回大会が開催され、以来、勤労青年のスポーツ・文化活動の発表と技能向上の場として、全国の青年団が中心となって毎年東京で開催しています。この大会は、一部の種目を除き国民体育大会や国際競技会などに出場した経験のある選手には参加資格がなく、地域で地道にスポーツや文化活動に携わっている青年が参加するものです。地域のスポーツ、文化活動の裾野を広げ、より多くの青年たちに活躍の場を提供するとともに、全国から集まった青年たちの交流と友好を深めることにも重点を置くことにより、平和で文化的な住みよい地域を創っていくことを目的にしています。

第64回大会での参加者数は交流種目を含めて37都道府県から2,146名、昨年度に比べて全体では65名の減少となりましたが、石川県では郷土芸能などで55名の増加となり、今大会でもっとも参加者増となった県団でした。他にも山梨県や沖縄県からの参加者が20名以上増えました。

開会式には昨年度に引き続き瑶子女王殿下にご臨席いただきおことばを賜りました。また、安倍内閣総理大臣からメッセージをいただいたほか、義家弘介文部科学副大臣より祝辞をいただきました。

各競技においては、地元を代表して出場している選手たちらしく、各種目で熱戦・熱演が繰り広げられました。新たな取り組みとしては、開会式にご臨席いただいた瑶子女王殿下に翌日の剣道競技の選手たちとご懇談いただき、意見交換することができました。また、合唱では被爆・戦後70年の年に合わせ、参加者からの発案で「ＨＥＩＷＡの鐘」の記念合唱を行い、チームの垣根を越えた交流の場をつくることができました。また、意見発表と合同開会式を行ったことにより鑑賞者が増え、来年度合唱に参加したいとの声もいただきました。交流企画として実施した「全国青年団ダーツ大会」では、（公社）日本ダーツ協会に主管団体を務めていただき、当日の運営や参加者拡充に協力いただきました。なお、民俗芸能を形を変えることなく若者の力で継承している団体に贈られる後藤文夫賞は、民俗芸能の部に「東方臼太鼓踊り」で出演し、最優秀賞に輝いた熊本県湯前町青年団が受賞しました。

今年度の全国青年大会実施種目は以下の通りです。

＜スポーツ＞　バレーボール、バスケットボール、バドミントン、軟式野球、卓球、柔道、剣道、ボウリング、フットサル

＜芸能文化＞　合唱、郷土芸能、写真展、生活文化展、将棋、意見発表、のどじまん、舞台発表

＜交流プログラム＞　ダーツ大会

２）第61回全国青年問題研究集会の開催（3月4日～6日　山中湖畔荘清渓）

「青年問題研究集会」（青研集会）は、1950年代に日青協が創造した、働く青年の生活課題解決を目指す学習・実践活動の集約の場としての集会です。1954（昭和29）年に、勤労青年の教育のあり方、考え方として「勤労青年教育基本要綱」を策定した日青協は、青年の自主的学習活動として「共同学習」運動を全国に呼びかけました。共同学習運動は、仲間づくりと話し合い学習

を重視し、生活や活動の身近な問題を語り合う中から共通の課題を見出し、共同の力によって課題解決の実践に取り組んでいくという、青年の主体性、自主性を重視した実践的学習運動です。このような共同学習運動の全国的集約と発展的展開を目指す場として、日青協は1955（昭和30）年から「全国青年問題研究集会」（全国青研集会）を開催しています。青研集会は、青年個人や青年組織を巡る問題を、取り組んだ実践活動に基づいてレポート化し、テーマごとに分科会を設定して議論します。助言者の力も借りつつ参加者全体の討議によって問題の所在や社会的背景を明らかにし、再び地域で実践することで課題解決に努めることを目指しています。

今年度は14道県から72名の参加者が日本青年館分館・山中湖畔荘清渓に集まり、また同時開催した青年活動支援者フォーラムには12名が参加しました。

実践報告は、鳥取県連合青年団から「全国青年団種まき運動の取り組み」、熊本県あさぎり町青年団から「町長選公開討論会の取り組み」、福井県鯖江市連合青年団からは「結成60周年記念事業の取り組み」についてそれぞれ報告がありました。

講演は、長澤成次千葉大学教授から「語り合いはなぜ大切か～地域に生きる若者たちに向けて～」のテーマで、青年の生きづらさは自己責任ではなく、社会の構造上の問題に結びついているため、自分の問題と地域の問題と社会全体の問題をつなげて理解していくことに、語り合いの大切さがあるとお話いただきました。2日目からは参加者の持ち寄ったレポートを、課題別に設定された分科会で議論を深め、最終日にはそれぞれ決意を述べあって地域に帰っていきました。

３）2015（平成27）年度青年活動支援者フォーラムの開催

2007年から実施している、青年教育や青年活動の支援者同士のネットワークづくりをねらいとした事業は、今年度も「青年活動支援者フォーラム」とし、全国青年問題研究集会と同時開催しました。募集にあたり公民館職員や自治体職員、また青年会館にも呼びかけ、様々な形で青年を支援する立場の方々が集まる場にすることをめざし、全国から12名の参加者を迎えることができました。

本事業のコーディネーターには北海道大学特任教授・名誉教授の姉崎洋一先生、千葉大学教授の長澤成次先生、日本体育大学教授の上田幸夫先生に依頼しました。冒頭に全体講義として、内閣府青少年担当調査官の小山浩紀氏より「地域創生と青年活動の可能性」をテーマに、地域活性化と青年活動がどのようにリンクするのか、内閣府が取り組む若者支援施策やこのほど改定された「子ども・若者育成支援推進大綱」にも触れていただきお話いただきました。続いて、日本青年館公益事業部・月刊誌「社会教育」編集長の近藤真司氏から「これからの社会教育・青年教育の展望～中教審答申から見えること」をテーマに、実践者、支援者それぞれの立場で社会教育・青年教育にどのように関わっていくのか、中教審答申の解説も含めてお話いただきました。その後２つの分科会に分かれ、福井県福井市教育委員会や新潟県十日町市の青年教育振興の事例報告を元に、「困りごとからつくる青年教育の未来」というテーマを設け、参加者が活動や支援にあたり直面する課題や苦悩をワークショップ形式で出し合い討議を深めました。本事業を通じて、青年教育や若者支援に携わる人たちが、都道府県や職業、所属などの垣根をこえて経験を交流し、課題を共有する場にすることができました。

４）全国地域青年「実践大賞」の開催

全国の優れた青年活動の取り組みに学びあい、それを顕彰することをねらいに、全国の青年

団や教育委員会などを通じて呼びかけた「全国地域青年『実践大賞』」には、５道県から７実践の活動事例の応募がありました。審査会では「実践が少なかったのは残念だが、それぞれの実践は地道に地域に向き合い取り組んでいる」「他の団体や地域住民との連携が日頃よりできている青年団ならではの実践」と評価をいただきました。審査員及び受賞団体は次の通りです。

◇審 査 員　　萩原建次郎　氏（駒澤大学教授）
　　田中　浩之　氏（東京新聞広告局広告二部部長）
　　三友　千春　氏（元日本青年団協議会副会長）
　　坂野　直子　　（日本青年館公益事業部事業課長）
　　鳥澤　文彦　　（日本青年団協議会事務局長）

◇実践大賞

活動に常時または定期的に取り組み、地域に大きく貢献した実践を行った1団体に表彰状並びに活動奨励金5万円を授与する。

受賞団体　　・大川村青年団（高知県）
　　「早明浦ダムを活用したウォータースポーツの検討と実践」

◇準実践大賞

実践対象に次いで優れた実践に取り組んだ団体に表彰状並びに活動奨励金3万円を授与する。

受賞団体　　・岩見沢市青年団体協議会（北海道）
　　「ＵＰ　ｏｒ　ＯＵＴ？」

◇実践奨励賞

長期間にわたって取り組まれている実践や、新たな活動に取り組んだ実践など、上記二賞に準ずる団体に表彰状を授与する。

受賞団体　　・南空知青年団体協議会（北海道）
　　「南空青年祭」
　　・有度青年団（静岡県）
　　「宅配　まめまき」
　　・小林市青年団協議会（宮崎県）
　　「小林市青年団協議会主催子供事業　地域の魅力に着目した『合科授業』」

◇全国青年団ＯＢ会奨励賞

全国の青年団にとって励みとなるような組織強化拡大に顕著な実績を上げた団体に、全国青年団ＯＢ会より表彰状と活動奨励金5万円を授与する。

受賞団体　　・鯖江市連合青年団（福井県）
　　「鯖江市連合青年団結成60周年記念事業」

◇全国青年団ＯＢ県議の会奨励賞

青年団活動に自信と誇りを持ち、地域に暮らす人々の励みとなるような地域活動に顕著な実績を上げた団体に、全国青年団ＯＢ県議の会より表彰状と活動奨励金5万円を授与する。

受賞団体　　・福井県連合青年団（福井県）
　　「第60回福井県青年問題研究集会と青年団体活動活性化研究会の

同時開催」

◇後藤文夫賞

後藤文夫（1934～1936、岡田内閣で内務大臣、1979 年 95 歳で逝去）は、日本青年館理事長を二度（1930～1934、1956～1969）にわたり務め、開館当時より民俗芸能の発掘や発展に尽力してきました。その功績を偲び、1991 年度より「全国青年大会郷土芸能部門」に後藤文夫賞を創設し、民俗芸能を形を変えることなく若者の力で継承している団体に表彰状と活動奨励金 5 万円が贈られます。

受賞団体　　・湯前町青年団（熊本県）「東方臼太鼓踊り」

なお、田澤義鋪の実績に基づき、明正選挙運動、地方自治の発展や地域振興活動に取り組み、優れた成果を収めた団体に日本青年館より贈られる「田澤義鋪賞」は該当ありませんでした。

５）第46回北方領土復帰促進婦人・青年交流集会の開催（7月18日～19日　根室市）

日青協は1966（昭和41）年より北方領土返還要求運動に取り組み、1970（昭和45）年より婦人会の全国組織である全国地域婦人団体連絡協議会とともに、北方領土を望む納沙布岬での視察、北方領土問題の学習、元島民の返還への思いを聞くなどの内容で、北方領土復帰促進婦人・青年交流集会を開催してきました。また日青協は北方領土返還要求署名運動、世論啓発のための全国キャラバンなどにも取り組み、北方領土返還要求運動連絡協議会の議長団体も務めています。今年度は、全国から77名が参加して第46回北方領土復帰促進婦人・青年交流集会を実施しました。集会では元島民や二世の方々との交流、返還運動関係者が加わったグループ別意見交換会などを行い、北方領土返還要求運動の重要性を再認識する機会となりました。

６）中華全国青年連合会との交流

日本青年団協議会は1956（昭和31）年より中華全国青年連合会（全青連）との交流を行っています。今年度は二つの事業を青年交流事業として実施しました。

（１）中国青年代表団の受け入れ事業の実施

（12月13日～17日　東京都、山梨県、栃木県）

全青連の張国来国際部副部長を団長とし、全青連傘下団体より選抜された青年指導者を中心に６名の代表団を受け入れました。期間中は都内のほか山梨県と栃木県を訪れ、文部科学省の徳田正一審議官を表敬訪問したほか、青少年施設や科学技術施設などを視察しました。山梨県プログラムでは、山中湖畔荘清渓で静岡県や愛知県、岐阜県といった東海地区の青年団のほかに東京都の荒川区青年団体連合会役員も参加し、地域活動、若者問題、高齢者問題への対応といったテーマで意見交換会を行いました。栃木県プログラムでは栃木県連合青年団や栃木県青年会館の協力を得た視察プログラムを実施しました。

来日した代表団は以下の通りです。

団　長：張　国来(男)（中華全国青年連合会国際部副部長）
秘書長：羊　強振(男)（中国国際青年交流センター環境保護基金部科長）
団　員：張　暁莉(女)（中華児女報刊社弁公室主任）
団　員：劉　雪櫻(女)（中国青少年宮協会財務員）
団　員：祝　　軍(男)（中国青年政治学院学生処副処長）
団　員：冉　　勇(男)（中華全国青年連合会幹部）

（２）第24次植林訪中団の派遣（9月19日～23日　中国内モンゴル自治区）

長年にわたる中国の青年たちとの交流の経験にたち、1992（平成4）年より、軍事によらない国際交流と地球環境の保全という視点から、中華人民共和国の中で最大の青年組織である中華全国青年連合会と共に、内モンゴル自治区で沙漠の緑化事業に取り組んできました。2001（平成13）年には日本政府が日中緑化交流基金を設立、日青協も基金から助成を受け、内モンゴル自治区に加えて河北省豊寧満族自治県でも取り組んでいます。

今年度は、内モンゴル自治区オルドス市達拉特旗（ダラトキ）での植林活動に8名を派遣し、地元青年たちとともにポプラ400本を植林するとともに意見交換会も行いました。

派遣した訪中団は以下の通りです。

団　長：石井　昌志（日本青年団協議会副会長）
副団長：澤田　康文（日本青年団協議会監事）
顧　問：久保田満宏（日本青年団協議会顧問）
秘書長：鎌田　菜穂（日本青年団協議会事務局）
団　員：千葉加奈子（宮城県青年団連絡協議会副会長）
団　員：片桐　充弘（岐阜県青年団協議会顧問）
技術者：樋口　　拓（国立青少年教育振興機構）
技術者：大貫都志男（特定非営利活動法人地球緑化センター）

７）日韓青少年指導者交流事業（派遣）の開催（12月3日～6日　韓国ソウル、テジョンほか）

2012年に中央青少年団体連絡協議会（中青連）が解散した後、日青協はその事務局機能の役割を担ってきました。その中で、韓国青少年団体協議会（韓青協）との交流は日青協が窓口となって継続してきました。2013年度から２カ年にわたる相互交流を試み、その成果を踏まえ、今年度より日青協は韓青協と協定書を締結し、正式交流が始まり、今年度は日青協照屋仁士会長を団長とし、青少年団体から選抜された合計4名の代表団を派遣しました。今回の訪韓ではソウルやテジョン、チョナン、パジュを訪問し、韓国の青少年活動の現場スタッフとの意見交換をはじめ、独立記念館を視察するなど、東アジアの平和と友好についても学習を深めました。2年間の代表交流を経て正式交流につながったという点では、民間レベルの国際交流が一つ増えたことであり、東アジア社会における青年交流の今日的な意味を裏付ける上で、日青協がその一翼を担う点で大きな意味があり、今後も役割を担っていくことが期待されています。

派遣した団員は次の通りです。

団　長：照屋　仁士（日本青年団協議会会長）
秘書長：棚田　一論（日本青年団協議会総務部長代理）
団　員：武田　　悠（盛岡ＹＭＣＡ）
団　員：内村　優太（九州大学ＹＭＣＡ名島寮）

８）東日本大震災で被災した仲間の想いを風化させないための取り組み

東日本大震災から５年の節目を迎えました。震災の被災地でもある岩手、宮城、福島の青年団の中には、震災の犠牲となった仲間や大きな被害を受けた仲間も決して少なくありません。日青協は震災直後より生活物資の支援やボランティアの派遣、募金活動など被災地に向けた取り組みを全国的に展開し、震災の記憶を継承していくことに努めてきました。その一環として、昨年度製作したパネル第１部「あの日の証言」に続き、第２部「復興に向けて」を完成させること

ができました。製作したパネルは第１部、第２部ともに全国の青年団を中心に貸出を行っています。

また、北海道大学大学院の辻智子教授の協力を得て、震災の発生以降より青年をはじめ被災地や避難地で暮らす人々の生活記録を綴ってきた冊子「生きる」の第4号を発刊しました。

２．第６４回全国民俗芸能大会の開催
（11 月 21 日　オリンピック記念青少年総合センター大ホール）

全国各地に伝えられる民俗芸能は、各地の風土と生活の中で生まれ、地域の人々によって歴史的に育まれてきたものです。それらは国民の生活の推移を物語る貴重な民俗文化財でもあります。この大会は、このような各地の貴重な民俗芸能を舞台で公開し、民俗芸能の重要性を多くの人々に認識してもらおうと開催してきました。

歴史をひもとくと、日本で初めて地域の芸能を舞台で紹介したのが初代日本青年館のこけら落としとして開催された「郷土舞踊と民謡の会」で、1925(大正 14)年のことでした。戦後この流れを継承してきた当事業は、通算すると 74 回目となります。これまでに 460 あまりの芸能を紹介してきました。出演者にとっては大会出場が大きな自信につながり、これを契機に芸能の保存の機運も高まり大きな成果をあげています。また、早くからこうした芸能の記録保存に取り組んできたのも当大会でした。

今年度の第 64 回全国民俗芸能大会（文化庁補助事業）は、11 月 21 日、全国民俗芸能保存振興市町村連盟との共催で、民俗芸能学会と連携しつつ「地域を受け継ぐ若者たち」をテーマに開催しました。青年館建設中のため、オリンピック記念青少年総合センター大ホールを会場に開催し、演目数を減らし、一つひとつの演目をじっくりと鑑賞していただくプログラムにしました。会場が変わっても多くの方々にお越しいただき、盛会裡に終了しました。出演芸能は以下の通りです。

＜出演演目＞

・青森県下北郡東通村　　下北の能舞
・沖縄県名護市屋部　　名護の八月踊り

＜企画委員＞

・山路　　興造　　民俗芸能学会代表理事
・西角井　正大　　前実践女子大学大学院教授
・吉川　　周平　　京都市立芸術大学名誉教授
・星野　　紘　　元文化庁伝統文化課主任調査官
・齊籐　　裕嗣　　前文化庁伝統文化課主任調査官
・宮田　　繁幸　　文化庁伝統文化課主任文化財調査官
・吉田　　純子　　文化庁伝統文化課文化財調査官
・俵木　　悟　　成城大学文芸学部准教授
・神田　　竜浩　　（独）日本芸術文化振興会　国立劇場第二制作課主任
・久保田　裕道　　（独）国立文化財機構　東京文化財研究所無形民俗文化財研究室長

３．「The Seinen」と月刊誌「社会教育」の発行

１）「The Seinen」の発行

今年度は、「The Seinen」としては発行せず、「社会教育」10月号にて「青年・若者」を特集して発行しました。10月号では、「内閣府における子ども・若者育成支援施策について」(内閣府)、「若者のスポーツ・芸能文化活動の発展をめざして」(日本青年団協議会)等を特集しています。

２）月刊誌「社会教育」の発行

今年度も、月刊誌「社会教育」を12回発行しました。社会教育を多様な角度から幅広くとらえ、行政、施設職員、さらに様々な現場からの情報が満載されていると各分野の方々から好評を得ています。

平成27年度［特集内容］

4月（826号）　社会教育の政策づくり・マネジメント
5月（827号）　社会教育のイノベーション
6月（828号）　生涯学習振興法施行から25年～その成果と課題～
7月（829号）　社会を支える仕組みとしてのサポーター
8月（830号）　地域社会とスポーツ活動
9月（831号）　文化と地域～文化の力でまちを変える～
10月（832号）　青年・若者
11月（833号）　プラチナ社会と社会教育施設
12月（834号）　地方創生と教育
1月（835号）　教育・　生涯学習・コミュニティ
2月（836号）　「地域学校協働答申」　子どもをめぐる諸課題
3月（837号）　平成27年度の社会教育・生涯学習の総括と28年度への展望

３）書籍の増刷

今年度は、社会教育・生涯学習行政の関係者向けの書籍「新訂　入門・生涯学習政策」（著者：岡本薫政策研究大学院大学教授）を好評につき増刷（第６刷）しました。

４．図書・資料センター

日本で唯一、戦前･戦後期の地域青年団活動資料を所蔵する当館の図書･資料センターは、財団設立４年後の 1925（大正 14）年に建物の竣工とともに付設されました。以来、広く一般に公開してきましたが、とりわけ社会教育関係者、大学教師や大学院生などの研究者、自治体史編さん関係、ＮＨＫなどテレビ関係者等多くの方々に利用されてきました。今年度は日本青年館の移転建設のため、資料を厚木市にある倉庫へ搬出・保管し、閲覧を中止しました。

５．文化事業

１）ウィーン・ピアノデュオ・クトロヴァッツ（PDK）の交流公演

全国各地の方々に地元で世界レベルの音楽に触れる機会を提供することを目的に、ヨーロッパを中心とした海外からすぐれたアーティストを招聘し、全国的なコンサートツアーを実施しています。

今年度も世界最高峰のピアノデュオ奏者で、ウィーン国立音楽大学の教授も務めるエドワード＆ヨハネス・クトロヴァッツの両名を、11月29日～12月9日（コンサートツアー）の日程で招聘しました。12月に3会場で4公演を実施し、各地で大好評を得ることができました。12月3日の山口県長門市では、午後に市内中学生の芸術鑑賞、夜は一般向けのコンサートとして実施しました。

12月1日　　東京　銀座・ヤマハホール（一般公演　1回）

［主催：一般財団法人日本青年館］

12月3日　　山口県　山口県立劇場ルネッサながと

（中学生芸術鑑賞　1回、　一般公演　1回、　計2回）

［主催：公益財団法人長門市文化振興財団］

12月6日　　千葉県　船橋市民文化ホール（一般公演　1回）

［主催：船橋市民文化ホール］

２）山中湖国際音楽祭2015の開催（9月19日～21日　山中湖畔荘清渓）

優れた音楽芸術鑑賞の機会を多くの方に提供し、文化振興と若手音楽家の発掘・育成、開催地周辺の地域活性化に寄与することを目的に、2007年から山中湖国際音楽祭を開催しています。

今年で8回目を迎えた山中湖国際音楽祭は、オーストリアから4名、日本から6名の演奏家を招いて、3日間で4コンサートを実施し、西洋音楽と邦楽によるみごとな融合に、観客から大好評を得ることができました。観客数は3日間で総勢520名を得て、無事終了しました。

＜主催＞

一般財団法人日本青年館、株式会社ニッセイ、山中湖国際音楽祭実行委員会

＜後援＞

文化庁、オーストリア大使館、山梨県教育委員会、山中湖村、山中湖村教育委員会、山中湖観光協会、富士急株式会社、一般社団法人全日本ピアノ指導者協会、読売新聞東京本社、山梨日日新聞、山梨放送、テレビ山梨

＜協賛＞

株式会社ヤマハミュージックジャパン、他多数

＜協力＞

Tanaka Keiko Office、PDK 200 Club Japan、スピカ

＜出演者＞

［海外］

エドワード・クトロヴァッツ(Eduard Kutorowatz)　　ピアノ

クリスチャン・ショル(Christian Scholl)　　ヴァイオリン

シンシア・リャオ(Cynthia Liao)　　ヴィオラ

ルイス・ゾリタ(Luis Zorita)　　チェロ

［日本］

米澤　　浩　　尺八

三山　正寛　　津軽三味線

熊澤栄利子　　箏

デュエットゥ（木内佳苗、大嶋有加里）ピアノ

山本京子　　ピアノ

塚田　裕　　アート（インスタレーション）

６．高校オーケストラ活動支援事業

日本青年館の施設を活用してオーケストラ活動を通じた青少年の育成に取り組んで、22 年目を迎えました。「高校の吹奏楽は全国的な発表・交流の場があるが、オーケストラの場合はそうした場

がない。ぜひそのような場を…」という高校の先生方の声を受けてのスタートでした。以来、ティンパニやコントラバスなどの大型楽器の配備・充実に努めるとともに、平成 10 年には全日本高等学校オーケストラ連盟（事務局：日本青年館）を組織し、全国的なネットワークづくりにも取り組んできました。現在、連盟には全国 99 の高校が加盟しています。

今年度は、その連盟と協力して以下の事業に取り組んできました。

１）第 16 回全国高等学校オーケストラ・サマークリニックの開催（8/16～19　山中湖畔荘清渓）

（主催：全日本高等学校オーケストラ連盟、後援：（一財）日本青年館）

演奏技術のレベルアップと音楽を通じた交流と仲間づくりを目的に、全国の高校生に呼びかけて今回で 16 回目の開催になります。今回も夏休み期間中に 3 泊 4 日の日程で、関東地方を中心に 33 校から 189 名の高校生が参加。基礎的な力を高め、高校生同士の交流をはかり、プロ奏者からの直接指導による技術と人間性の向上を目標に開催しました。クリニックは、24 名の講師によるオーケストラ楽器の各パート毎に分かれての基礎練習、多様な編成によるアンサンブルやオーケストラ合奏の練習、最終日には 3 日間の成果を発表し合うアンサンブルとオーケストラの発表会と豊富な内容となっています。

また、期間中に「指揮法初級講座 2015 年度夏季」を実施し、学生指揮者を目指す生徒同士の交流と専門知識・技術の修得の場を設け、7 校・8 名の生徒が受講しました。

＊サマークリニック参加者在籍校は以下のとおりです。

〈福島県〉県立福島高等学校〈茨城県〉清真学園高等学校〈栃木県〉県立栃木女子高等学校
〈群馬県〉県立桐生女子高等学校　県立中央中等教育学校〈埼玉県〉春日部共栄中学・高等学校
〈千葉県〉県立千葉高等学校　聖徳大学附属女子中学校・高等学校　成田高等学校・附属中学校
県立小金高等学校
〈東京都〉白百合学園高等学校　明星学園高等学校　品川女子学院　淑徳高等学校
都立日比谷高等学校　明治大学付属中野中学校高等学校　都立三田高等学校
都立両国高等学校　国立音楽大学附属高等学校
〈神奈川県〉日本大学藤沢高等学校　神奈川県立鶴見高等学校　洗足学園中高等学校
森村学園中高等部　関東学院中学校高等学校　県立横浜平沼高等学校
〈新潟県〉県立高田高等学校〈長野県〉長野高等学校〈静岡県〉浜松開誠館中学校
〈京都府〉京都女子中学・高等学校〈岡山県〉清心女子高等学校〈広島県〉山陽女学園高等部
〈佐賀県〉県立伊万里高等学校

２）第 22 回全国高等学校選抜オーケストラフェスタの開催

（1 月 6 日～8 日 文京シビックホール）

全国の高等学校のオーケストラ部、弦楽部等を対象に、その技術力・表現力の向上と交流を深めることを目的に、全日本高等学校オーケストラ連盟と（一財）日本青年館との共催で開催しました。第 1 回から日本青年館で開催され、年々規模が拡大してきましたが、今年度は日本青年館の移転建設に伴い、文京シビックホール大ホールにおいて開催し、全国から 64 校 60 演奏団体のオーケストラ部や弦楽部の生徒 3,387 人が参加しました。

フェスタはこれまで大きく分けると 3 つの内容で構成してきました。メインは各学校の演奏です。同時に、会場で聴いている生徒一人ひとりが、演奏校へのメッセージカードに感想を書き、演奏することと演奏を聴き合うことの両方を大切にしてきました。各校は、このメッセージ

カードの内容を励みに、日々の練習に力に入れています。

二つ目はそれぞれの学校から選抜された生徒による演奏（オーケストラ、弦楽アンサンブル）で、ふだん学校ではなかなか演奏できないような大曲に挑戦しようというものです（演奏曲目と指揮者は下記の通り）。初めて一緒に演奏するメンバーが、限られたリハーサル時間の中で集中して作り上げた演奏は、多くの参加者の刺激となりました。

三つ目は生徒同士の交流会で、音楽を愛する仲間のネットワークを大きく広げる場になっています。

●選抜合奏

＜オーケストラ＞

演奏曲目：ワーグナー／ニュルンベルクのマイスタージンガー第１幕への前奏曲

指揮者：河地良智（洗足学園音楽大学教授・前同大学副学長）

＜弦楽アンサンブル＞

演奏曲目：アレンスキー／チャイコフスキーの主題による変奏曲

指揮者：大川内　弘（元日本フィルハーモニー交響楽団コンサートマスター）

●フェスタ出場校（64 校）は以下のとおり。（　）内数字は出場回数です。

〈宮城県〉仙台第一高等学校(13)　宮城第一高等学校(16)　富谷高等学校(10)

〈茨城県〉清真学園高等学校・中学校(20)

〈栃木県〉県立栃木女子高等学校(12)　県立鹿沼高等学校(10)

〈群馬県〉県立桐生女子高等学校(19)　県立中央中等教育学校(9)

〈埼玉県〉県立浦和西高等学校(20)　春日部共栄中学高等学校(22)

〈千葉県〉県立千葉中学校・高等学校(20)　千葉市立稲毛高等学校・附属中学校(20)
聖徳大学附属女子中学校・高等学校(22)　県立千葉女子高等学校(22)
県立津田沼高等学校(16)　県立幕張総合高等学校(18)
成田高等学校・附属中学校(14)　県立船橋高等学校(13)
県立小金高等学校(6)　市川中学校・高等学校(4)　東邦大学付属東邦高等学校(3)

〈東京都〉都立青山高等学校(18)　明治大学付属中野中学高等学校(20)
都立日比谷高等学校(11)　品川女子学院(11)　都立駒場高等学校(7)
江戸川女子中学高等学校(12)　都立三田高等学校(4)
田園調布学園中等部高等部(4)　恵泉女学園中学・高等学校(3)　都立西高等学校(3)
国際基督教大学高等学校(13)　明星学園中学校・高等学校(21)
明星中学高等学校(21)　玉川学園(7)　大妻多摩中学高等学校(3)
都立南多摩中等教育学校(3)

〈神奈川県〉神奈川大学附属中･高等学校(13)　森村学園中高等部(10)
関東学院中学校高等学校(9)　県立川和高等学校(7)　聖光学院中学校高等学校(6)
慶應義塾湘南藤沢中等部・高等部(5)　日本女子大学附属高等学校(4)
清泉女学院中学高等学校(4)

〈新潟県〉県立高田高等学校(10)

〈長野県〉長野高等学校(20)　上田高等学校(15)　須坂高等学校(7)　長野西高等学校(7)
屋代高等学校(7)　小諸高等学校(10)

〈岐阜県〉 県立大垣南高等学校(6)
〈静岡県〉 浜松開誠館中学校･高等学校(12)　西遠女子学園(10)
〈京都府〉 京都女子中学・高等学校(20)　ノートルダム女学院中学高等学校(4)
〈大阪府〉 府立清水谷高等学校(7)　府立高津高等学校(3)
〈岡山県〉 県立岡山朝日高等学校(12)　県立岡山城東高等学校(初)
〈広島県〉 広島大学附属中・高等学校(13)　山陽女学園中等部・高等部(7)
〈高知県〉 土佐中・高等学校(5)

３）全日本高等学校選抜オーケストラ海外公演の開催

（１）全日本高等学校選抜オーケストラ・オーストリア公演2016の開催

（3 月 24 日～4 月 1 日　オーストリア・ウィーン）

全日本高等学校オーケストラ連盟の主催・(一財)日本青年館の後援で、全国の中・高校生、大学生を対象に募集して選抜オーケストラを結成し、オーストリアでコンサートと交流会を行うことを通じて、一人ひとりの音楽性の向上と国際性を育てることを目的に毎年春休み期間に実施しており、今年度は第 20 回目の海外派遣となりました。

指揮者には、これまで高校オーケストラ事業をご指導いただいている、河地良智先生（洗足学園音楽大学教授・前同大学副学長）をお招きしました。

2 月 13 日～14 日（東京都立駒場高等学校／国立オリンピック記念青少年総合センター)、3 月 24 日～25 日（山中湖畔荘清渓）の 2 回の練習合宿を経て、3 月 26 日～4 月 1 日の日程でオーストリアを訪問しました。参加者は、全国 15 の中学校・高校・大学から計 27 人の生徒・学生と、日本青年館職員・指揮者・引率教諭・旅行社・撮影班等含め、総勢 40 人でした。

オーストリア公演の日程は、ウィーン・ヴォティーフ教会でのコンサート、オーストロラティンオーケストラとの交流演奏会と計 2 回の演奏会を成功裡に終了し、ウィーン市内の観光や様々な見聞を広げ、4 月 1 日に全員無事に帰国しました。

コンサート概要、参加校は下記の通りです。

①コンサート　（日時は現地時間）

（ⅰ）3 月 29 日（火）　19:00 開演　会場：ウィーン・ヴォティーフ教会

演奏曲目：ベートーヴェン／エグモント序曲、ビゼー／アルルの女組曲、
カルメン組曲より／滝廉太郎／荒城の月、グルック／
オーリードのイフィゲニア序曲

（ⅱ）3 月 30 日（水）19:00 開演　会場：ウィーン第９区・区役所ホール

「オーストロラティンオーケストラとの交流演奏会」

演奏曲目：ベートーヴェン／エグモント序曲、ビゼー／アルルの女組曲より
滝廉太郎／荒城の月、久石譲／天空の城ラピュタ、ヴェルディ／椿姫より

②参加者在籍校（全国 15 校より 27 人の演奏メンバーが参加)

《茨城》茨城大学　《埼玉》浦和明の星女子中学校・高等学校
《千葉》県立船橋高等学校
《東京》明星学園高等学校　東洋英和女学院高等学校　捜真女学校中等部
自修館中等教育学校　早稲田大学
《神奈川》県立横浜平沼高等学校　日本大学藤沢高等学校

《長野》長野高等学校　上田高等学校　松本蟻ヶ崎高等学校　長野日本大学高等学校
《京都》京都女子高等学校

また、例年、オーストリア公演の国内合宿に合わせて実施している「指揮法初級講座 2015 年度冬季」を、1 月 31 日・国立オリンピック記念青少年総合センターにて開催しました。（全日本高等学校オーケストラ連盟の主催、(一財)日本青年館の後援）

4 校 6 人の生徒が参加し、指揮者の河地良智先生の指導により、指揮法の基礎を学びました。

参加者の在籍校は以下の通りです。

〈千葉県〉県立船橋高等学校
〈東京都〉都立青山高等学校　都立三田高等学校　都立駒場高等学校

（２）学校選抜オーケストラの派遣　（3 月 28 日～4 月 4 日　ドイツ・ニュルンベルグ）

千葉県立千葉女子高等学校オーケストラ部を学校選抜オーケストラとしてドイツへ派遣し、ニュルンベルグにて演奏会を行った。

（主催:千葉県立千葉女子高等学校オーケストラ部後援会　共催：(一財) 日本青年館）

７．第20回清渓セミナーの開催（10月28日～30日　スクワール麹町）

地方自治体の若手政治家の研修・交流の場として実施してきました本セミナーは、今年、会場を四谷駅前にあるスクワール麹町に移しての開催となりました。参加者は27都府県より72名。今回の講座と講師は以下の通りです。なお、次回の第21回清渓セミナーは日程を二日間とし、2016年11月17日（木）～18日（金）に同じく四谷駅前にある主婦会館を会場として開催する予定です。

「『失われた20年』で激変した雇用と子育て環境」
労働経済ジャーナリスト　小林　美希氏
対談「権力とマスコミそして霞ヶ関」　元通産省官僚　古賀　茂明氏
白鴎大学教授　福岡　政行氏
「マイナンバー時代のＩＴを活用した自治体サービス」
千葉市総務局次長、ＣＩＯ補佐監　三木　浩平氏
「パネルディスカッション～弱体する議会　さまよう自治」
取材報告　毎日新聞東京本社記者　日下部　聡氏
議会報告　福島県西郷村議会議員　佐藤　富男氏
香川県さぬき市議会議員　川田　礼子氏
コーディネート　愛知県日進市議会議員　白井えり子氏
コメンテーター　山梨学院大学教授　江藤　俊昭氏
「戦後70年の政治・経済・外交」　白鴎大学教授　福岡　政行氏
「政治家のための情報検索スキルアップ講座」
桜の聖母短期大学キャリア教養学科講師　木川田朱美氏

８．第71回田澤義鋪記念会の開催（11月１日　明治神宮）

田澤義鋪の残した民主的平和的な社会教育上の精神と業績を伝え、これの実現に努めることを

目的に、毎年、田澤義鋪記念会を開催しています。

今年は、11 月 1 日の明治神宮秋の大祭時に開催されている大九報光会（大正 9 年の青年団御造営奉仕を記念する会）と合同で、明治神宮で開催しました。

記念講演は、昨年 10 月の全国青年団ＯＢ大会で刊行したブックレット『明治神宮と青年団の造営奉仕』をまとめていただいた今泉宜子氏（明治神宮国際神道文化研究所主任研究員）。造営奉仕の青年団記録などの資料を使い当時の青年たちの活動内容をリアルに報告されました。記念会後は明治神宮秋の大祭に参加するなど、例年とは大きく異なり、記念すべき内容になりました。

９．国際交流活動

１）中日青年交流センターとの交流

中日青年交流センターは、1984年、当時の中曽根康弘内閣総理大臣と中国の胡耀邦総書記との共同発意によるもので、日中友好21世紀委員会が、その建設をそれぞれの政府に提唱し、日本政府の無償資金協力と中国政府の資金により1991年共同プロジェクトで建設された施設です。以来、日本青年館は施設の運営等について支援するため、中日青年交流センターから研修生を受け入れるなど施設間の交流を続けてきました。

今年度は、相互交流のカウンターパートである、中日青年交流センターの事情により受け入れ、派遣ともに行うことができませんでしたが、2016年に入り、中日青年交流センターの新しい主任として、光華科学技術基金会主任であった「任晋陽」（52才）氏が新たに着任し、主任もしくは副主任を団長とした幹部職員の訪日について打診がありました。訪日の実現に向け協議を行っており、早ければ次年度の4月にも訪日が実現する予定となっています。

１０．関連事業

１）全国青年会館協議会活動

各県における青年団運動の拠点としての役割を担う青年会館の建設は、昭和25年2月の佐賀県青年会館がスタートでした。その後、各地に青年会館の建設運動が起こり、現在20の都道県に青年団の手による青年会館が建設されています。それらの青年会館同士の連絡協調と青年団体の振興、地域社会の発展を図ることを目的として、全国青年会館協議会が組織され活動しています。

主な活動内容は、財団運営に関わる研修、青年団をはじめとする青少年団体への支援、施設運営のノウハウの相互交換など多岐にわたっています。また、中日青年交流センターとの交流など、国際交流も行い施設の運営等に役立てています。今年度は以下の活動を展開してまいりました。

（１）総会・役職員会議の開催（6月22日～23日　沖縄県青年会館）

今年度は12会館から16名の参加を得て、総会と役職員会議を同時開催しました。総会では、平成26年度の事業報告・決算、役員選出（2年の任期）及び平成27年度の事業計画・予算を承認・決定しました。また、今回は日青協の照屋仁士会長（沖縄県選出）、鳥澤文彦事務局長にも参加いただき、地域青年団の支援について意見交換を行いました。翌日は美ら海水族館や辺野古岬を視察し解散しました。総会にて、平成28年度の総会を岡山県青年館において開催することが決定されました。

（２）理事会の開催（2月23日　日本青年館虎ノ門事務所）

平成27年度決算見込み、平成28年度事業計画と予算について審議するために理事会を開催しました。理事会では、新たな国際交流事業として、韓国釜山の「アルピナホテル」との交流についても議論があり、今後の交流に向けた先遣隊を派遣することを決定しました。また、岡山県青年館での平成28年度総会は6月14日（火）15日（水）とすることを決めました。

（３）平成28年度年賀寄付金配分助成打合会の開催（9月25日　日本青年館虎ノ門事務所）

昨年度6県の青年会館からの年賀寄付金配分助成申請がすべて不受理であったことを受け、次年度の申請にあたり、審査委員会の傾向を探り、申請事業について研究することを目的に開催しました。参加した会館は岩手県青年会館佐々木常務理事、栃木県青年会館柴田事務局長、熊本県青年会館宮川常務理事と日青協鳥澤事務局長。

会議には、日本郵便（株）総務部・社会貢献室室長の戸田和宏氏をお招きし、参加会館から申請予定の事業について助言をいただきました。青年会館の老朽化に伴う施設改修については、優先度が低く採用の見通しは低いことが報告されたことをうけ、今後は別の観点から採用に向けて検討していく必要があることを確認しました。

なお、平成28年度は栃木県青年会館のマイクロバス配備事業（290万円）と沖縄県青年会館のワゴン車配備（163万円）について受理されました。

２）全国青年団OB会総会岩手大会の開催（10月12日～13日　鶯宿の宿森の風）

今年度は岩手県雫石町にて、28都道府県から217名（県外118名、県内99名）の参加を得て開催しました。

初日は総会の後、天台宗中尊寺貫首である山田俊和氏による、「世界遺産中尊寺と復興支援について」と題する記念講演を行い、夜の大交流会では、達増拓也岩手県知事にもご参加いただき、地元高校生による郷土芸能「上駒木野参差踊」や、国指定の重要無形民俗文化財である「岩手鬼剣舞」、「山屋の田植踊」等が披露され、大いに盛り上がりました。

翌日は盛岡市先人記念館、もりおか歴史文化館を見学し岩手の歴史を学んだ後、昼食会をもって終了しました。なお、その後に２つのオプショナルツアー「世界遺産を巡る」（参加者１７名）、「キズナ復興ツアー」（参加者２０名）が用意されており、それぞれ中尊寺、陸前高田を訪問しました。

今後の総会予定は以下の通り。

①第35回総会北海道大会　平成28年 9月 4日（日）～ 5日（月）定山渓温泉
②第36回総会熊本大会　　平成29年10月 9日（月）～10日（火）ホテル日航熊本（予定）
③第37回総会福井大会　　平成30年10月14日（日）～15日（月）あわら温泉（予定）

３）大九報光会の開催（11月1日　明治神宮）

明治神宮造営に際し、全国の青年団が労力奉仕にあたり、そのことがきっかけとなって日本青年館は誕生しました。その造営の労力奉仕に参加された方々が1950年（昭和25年）11月1日、明治神宮御鎮座30年祭に参加された折、そのことを記念して大九報光会を結成しました。「大九」とは、明治神宮御鎮座の年、大正九年に由来し、さらに耐乏生活に耐え、光明と希望に生きる耐久生活にもかけて命名されたものです。以来、ほぼ毎年11月1日に労力奉仕に参加された方の二世、三世の方々等により明治神宮において総会が開催されています。

今年度は田澤義鋪記念会と合同にて開催し、大九報光会19名、田澤義鋪記念会18名合計37名

の参加となりました。午前中は、明治神宮国際神道文化研究所の今泉宜子主任研究員が「田澤義鋪と明治神宮－青年団造営奉仕から大九報光会への展開」との演題で講演を行った後、秋の大祭に全員で参列しました。

４）清渓フォーラム行政懇談会の開催（11月27日～28日　富山県魚津市）

青年団出身の首長で組織している清渓フォーラム（会員：大崎市、富谷町、甲斐市、舟橋村、魚津市、長門市）幹事会を6月9日に都内ホテルにて開催しました。

また、行政懇談会は富山県魚津市において開催し、魚津市・澤崎義敬市長、大崎市・伊藤康志市長、甲斐市・保坂武市長、長門市・大西倉雄市長のほか日青協の照屋仁士会長も参加し、日青協が進める「種まき運動」について特別報告しました。

当日は、魚津市から「市民バス運行事業の取り組み」「地域協同のまちづくり」の２点の事例報告を受けた後、「地域社会におけるリーダー育成など政策連携を進める」事を柱とした魚津宣言を採択し、翌日は日本海側初の水族館である魚津水族館などを視察しました。来年は宮城県大崎市での開催が決まっています。

５）全国青年団ＯＢ県議の会奨励賞の贈呈

平成 16 年に、全国の青年団への支援と地域社会の発展に寄与する事を目的として結成されました。今年度の現役青年団活動への奨励賞は、3 月 6 日に開催された全国青年問題研究集会において、福井県連合青年団の「第 60 回福井県青年問題研究集会と青年団体活動活性化研究会の同時開催」に贈呈しました。

６）「明治神宮と青年団の造営奉仕」の出版

平成26年に開催した全国青年団ＯＢ会総会東京大会において、明治神宮国際神道文化研究所主任研究員今泉宜子さんに「明治神宮と青年団の造営奉仕」について講演をお願いしました。その講演記録に加筆し、全国青年団ＯＢ会と日本青年館により10月12日に、「明治神宮と青年団の造営奉仕」を出版しました。平成27年度全国青年団ＯＢ会岩手大会において配布すると共に、各県青年団OB会・青年会館や日青協加盟青年団への広報を行いました。月刊誌社会教育や日本青年団新聞への掲載はもとより、日本出版販売株式会社にも取り次ぎを依頼した結果、販売分が387冊、贈呈が567冊、現在残部は244冊となっています。

７）日本青年館お別れパーティー開催（4月1日　日本青年館中ホール）

4 月 1 日の業務終了後、館内テナントの従業員の皆様をお招きして中ホールにて開催し、青年館への感謝と惜別の念を分かち合うことができました。

１１．後援・協力事業

今年度、日本青年館が依頼を受けて後援･協力をした事業は下記のとおりです。

① 版画フォーラム2015年和紙の里ひがしちちぶ展　（平成27年6月20日）
〈主催者〉版画フォーラム実行委員会
後援名義使用、日本青年館賞提供

② 第41回太陽美術展　（平成27年11月16～24日）
〈主催者〉太陽美術協会
後援名義使用、日本青年館賞提供